

天草崎津地区における漁村景観の保全に関する研究

熊本大学工学部 学生会員 ○川崎健史
熊本大学大学院 学生会員 原田茉林

熊本大学大学院 正会員 田中尚人
熊本大学大学院 正会員 本田泰寛

1. はじめに

崎津地区は羊角湾に面した小さな漁村であり、隠れキリシタンの里として知られている。集落内にある崎津天主堂では、現在でも信者により祈りが捧げられている。

現在崎津は原油高や後継者不足から、漁業が衰退の一途を辿っている。さらに、崎津天主堂を長崎の教会群と共に世界遺産にしようという動きから、観光客が増加し、崎津の昔ながらの漁村景観が危機に瀕している。

本研究では、この景観を保全するために、崎津の漁村景観の主な構成要素であるカケ・トウヤに着目して分析を行ない、崎津の漁村景観の成り立ちとその変容を把握することを目的とする。



図1 崎津平面図 (ゼンリン地図を元に筆者作成)

2. 地形に着目したカケの成立に関する分析

崎津の独特な自然環境を理解するために、崎津の地形的特徴とカケの分布を整理・把握した。

(1) 崎津の地形的特徴

崎津は山を集落のすぐ後方に有して、そのために宅地が非常に狭く、住宅が密集している。加えて、埋め立てが数回に渡って行なわれているが、海岸沿いに道路を設けられるということがなく、住宅が海岸沿いに建っている事も特徴として挙げられる。

(2) カケの概要

カケとは陸地から海に突き出した足場で(写真1参照)、漁師は船着場や干物干し場として、漁師でない人も洗濯物干し場として利用している。カケの材料はシュロの木・竹を使っていたが、現在では鉄骨・コンクリート・木が多い。カケの大きさは様々だが、およそ幅5m・奥

行き4mである。

(3) カケの分布

現在カケが現役で使用されている船津・中町・下町区を対象に、分布調査を行なった(図2参照)。

調査から全部で19基のカケが存在し、すべてのカケが海岸線から海側に突き出して築造されているということが確認できた。分布範囲としては、中町・下町区に集中していることが確認できた。

(4) カケの成立要因

崎津の地形として、山を背に前面には海が広がるため宅地が非常に限られている。そのため、住民が自らの生活の場を広げるために海に突き出したカケを築造したと考えられる。

3. 交流活動に着目したトウヤの役割に関する分析

崎津の地域住民たちの交流活動において、トウヤの果たしている役割を理解するために、現地調査によってトウヤの成立過程・分布・用途などを把握し、その役割について分析した。

(1) トウヤの概要

トウヤとは家と家との間の路地のことで(写真2参照)、崎津では背戸屋とも呼ばれている。トウヤは誰もが通ることができる公共の道で、ほとんどの戸口はトウヤに向けて設けられている。すべての家と家との間がトウヤというわけではなく、住民によってどの路地がトウヤであるかの把握がなされている。

(2) トウヤの成立過程

トウヤは私道を公共の道として使っているものと、家が隣接する者同士が所有地を道として提供し、使ってい



写真1 カケ



写真2 トウヤ

るものの2種類あることが確認できた。さらに互いに同じだけ敷地を提供してきているトウヤは、「等々(とうとう)」という形容詞を使って区別されていることも確認できた。

(3) トウヤの分布

崎津地区に存在するトウヤの分布調査と、戸口の位置調査を行なった(図2参照)。その結果、ほとんどのトウヤが海に向けて設けられていることが確認できた。さらにカケの分布と合わせてみると、トウヤの延長上に多くのカケがあると確認できた。これはカケに行く際にトウヤを通る場合があるためと考えられる。

(4) トウヤにおける交流活動

現地調査から、家同士が近いために頼みごとをしやすく、様々な面で互いに協力しあっていたということが確認できた。さらに、カケに行く際にトウヤを通ることがあることから、トウヤは人が漁船に乗るための通路としての役割を果たしていると言える。

これらの交流活動を支えることが、トウヤの持つ通路としての役割とは別の重要な役割であると考えられる。

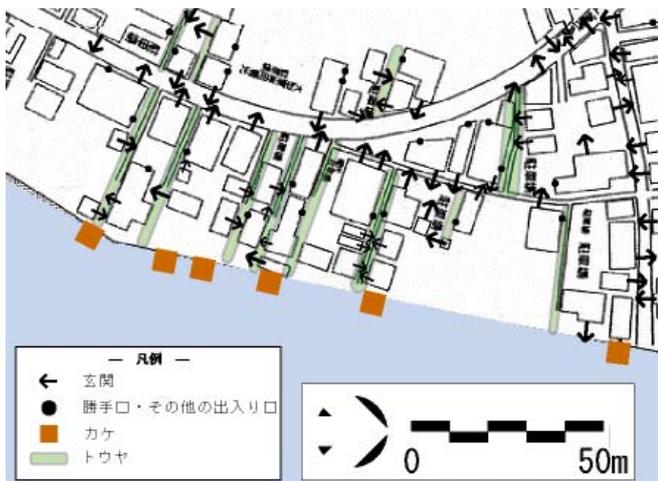


図2 カケ・トウヤ・戸口位置関係図(ゼンリン地図を元に筆者作成、一部抽出)

4. 漁村景観の変容に関する考察

本章では漁村景観を支える人々の生活や産業の変遷を調査し、漁村景観の変容を把握することを目的とする。そのために崎津地区全体を対象に、人々の生活・産業の変化を整理する。これを元に漁村景観と人々の生活との相互関係について考察する。

(1) 昭和30年代の崎津の様子

かつての崎津の漁村景観を把握するために、漁師9人・漁師でない人6人にヒアリング調査を行なった。そ

の結果、「映画館や芝居小屋などの娯楽施設が多く存在した」こと、「天然の良港だったため、様々な地域から漁をするため人が多く集まり、賑わっていた」ことなどから、住民の実感として崎津が最も活気づいていたのは昭和30年代であるということが確認できた。また、カケ・トウヤについて関連が見られる項目として、次の4つを挙げられる。

まずカケについては、「地引網でカタクチイワシを獲っていて、それを干すための小島水産の巨大なカケが存在した(写真3参照)」こと、「カケの材料を今富から持ってきていた」ことである。次にトウヤについては「現在より深く近所づきあいが行なわれていた(写真4参照)」こと、「空き地がなく、家が密集しており、傘がいらなくらい屋根が近かった」ことである。



写真3 小島水産のカケ 写真4 路地風景

(2) 昭和30年代と現在との比較・考察

現在ではカケは減りつつあって、漁村の生業である漁業が衰退の一途を辿っている。さらに空き地・空き家が目立ち、近所づきあいが薄くなってきている。このことからカケ・トウヤがものとして存在していることだけでなく、その上に住む人々の生活がなくては存在し得ないということが考えられる。そして保全を考える際にはものの保全だけでなく、人々の生活も考慮する必要があると考える。

5. おわりに

本研究ではカケ・トウヤについてそれぞれ地形・交流活動という視点から分析し、崎津の漁村景観の成り立ちとその変容を把握した。今後より深く調査を行ない、その結果をもとに保全の指針を決めていく必要がある。

謝辞: 本研究では、平田豊弘氏をはじめとする天草市教育委員会の方々、崎津地区の住民の方々に調査にご協力いただいた。ここに感謝の意を表す。

参考文献: 1) 大林太良: 日本民俗文化体系第五巻 山民と海人=非平地民の生活と伝承=, 株式会社小学館, pp.333-344, 1983 2) 富津の文化伝承の会編集委員会, ふるさとの文化(第一集), 富津の文化伝承の会, 2001 3) 宮崎久松: 河浦町郷土史(第一輯), 河浦町教育委員会, 1964 4) 山腰雅春: 河浦町郷土史(第二輯), 河浦町教育委員会, 1960 5) 図説天草の歴史, 株式会社郷土出版社, 2007